御 井 の 風 景

「藤原宮御井歌」にみる風景の構造 III

LIVED SCENERY: 'HOLLY WELL' IN "FUJIWARA-GU"

Scenery-structure in "MANYOH-SYU" poem No. 52 III

香 西 克 彦*

Katsuhiko KOHZAI

This paper starts with a conviction that "Manyoh-Syu" poem no.52 is a text for the structure of Scenery. It is the last part of the hermeneutic thinking on the poem and the sequel to the previous paper on Scenery of "Yoshino". Considering the meaning of "Mii", or holly well, two places -Yoshino and Fujiigahara- were integrated into the whole Scenery Structure of "Fujiwara-Kyo". In conclusion, the Scenery of "Fujiwara-Kyo" can be an example of the principles that the human being lives in the "Twofold-World".

Keywords: scenery, place, Manyoh-Syu, Yoshino, Fujiwara-Kyo, Twofold-World

風景, 場所, 萬葉集, 吉野, 藤原京, 二重世界

I. 序

『萬葉集』「藤原宮御井歌」に定位し、風景なるものとその現れの構造を解明せんとする試みである。前稿¹⁾に於いて、吉野とはそもそもどのような場所として「生きられ」ていたか、はたまたその吉野は持続にとってどのような意味を有している場所であるかについてその大略が、「見え」ない吉野が詠み込まれていることに起動され、第一段階の考察として整理されたわけである。がしかし、例えば雨乞いの場所というだけでは未だ「御井歌」に詠まれてあることの説明にも、二つの場所の関係の説明にもなっていない。再び原点である「御井歌」へ帰ってみなければならない。

やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子 荒たへの 藤井が原に
大御門 始めたまひて 埴安の 堤の上に あり立たし 見したまへば

大和の 青香具山は 日の経の 大御門に 春山と しみさび立てり
畝傍の この瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいます
耳梨の 青菅山は 背面の 大御門に 宣しなへ 神さび立てり
名ぐはしき 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける

高知るや 天の御陰 天知るや 日の御陰の 水こそば 常にあらめ
御井の清水 (巻一— 五二)

言うまでもなくこの歌は、藤原宮の、そして持続の永遠ならんことを言祝ぐための歌、即ち持続讃歌であり、新宮(京)讃歌であった。そうした歌の主旨に即した観点からの考察を缺かすわけにはいかないからである。そして注目すべきはこの新宮の御井を、中心に持ち出して詠うことに拠って讃歌たり得ているという点である。先の吉野は絶えることなく流れ続ける川に拠って、その永遠性が願われたのであったが、ここでは汲めども盡きることなく滾々と湧き出したであろう「御井の清水」の「常」なることを詠むことが、とりもなおさず藤原宮(京)の常久なることを言祝ぐことなのである。それはこの歌が結論部である最終段落の最終句「常にあらめ 御井の清水」へ向けて構成されていることから裏付けられようし、そもそもこの歌には「藤原宮御井歌」という題が付せられていたことを忘れてはならない。このように「井戸」に拠って言祝がれる例は他に見当たらないことであるだけに注目する必要がある。

こうした注目のもと、この「御井歌」全体から吉野の意味の第二段階の考察が展開される。吉野の風景がより明確に結像し、と同時に藤原京の風景の全体構造が素描されんことが目指されているのである²⁾。

II. 藤原宮の御井

それではこの藤原宮の御井とはどのような由来を持った井戸なので

* 財団法人啓明社 研究員・博士(人間・環境学)

Researcher of Foundation Keimei-sya, Dr. Human and Environmental Studies

あろうか。「藤原宮に御井があった、といふより、…(略)…、よい井泉があったのでそのあたりを藤井が原と呼び、略して藤原ともいひ、そこを中心に宮殿が営まれ、その宮を藤原の宮と呼んだと見るべきである。上代人にとって良水の出る井泉は珍重せられ、そこを中心に宮が営まれたり聚落が形づくられたりしたのである⁹⁾」。これが従来の藤原宮(京)及びその御井についての代表的な見解であるのだが、これに対し「藤原宮周辺の地勢は、東方と南方が高く、多武峰山系に降った雨は地下水となって、東と南からここに集まってくる。それも地表の下の深いところを流れてくればよいが、香具山の西方一帯は、地下水の水位が高く、到るところで地下水が湧出して、放置しておく湿地帯になってしまうような所であ¹⁰⁾り、「このような湿地帯の藤原宮地に『藤井』と呼ばれるような名泉があったとは考えられない。『藤井』の名からすれば、井の傍らに藤が自生していたはずであるが、纏つくべき樹木もない湿地帯の原野に、藤が自生するはずもないのである⁹⁾」という状況が真相を言い当てているのであれば、藤原宮の御井は宮に新しく掘られた堀井ということになる。とすれば「御井」そのものに元々特別な意味があるのではなく、井戸に関して古代人がどのような観念を抱いていたのであるかが問題とならねばならない。

例によって文献を渉猟するという手続きがここでも有効ではあろうが、それは後に譲ることとして、ここでは宮、しかも新しく造営された宮、と井の関係を先ず考察しておくべきであろう。と言うのもこの「御井歌」には作者未詳の、

藤原の 大宮仕へ 生れつくや 娘子がともは ともしきろかも
(巻一―五三)

という短歌が付されているからである。長歌である「御井歌」とこの短歌は言うまでもなく一組のものであって「御井歌」のみで論ずることは危険でもあろうからである。歌の意味は「藤原の大宮にお仕えするために生まれついてきた娘子たちはうらやましいことよ」というほどのものであろう。この長短歌と照応して類似した八一番歌がある^{9,7)}。

和銅五年壬子の夏四月、長田王を伊勢の斎宮に遣はす時に、山辺の御井にして作る歌
山辺の 御井を見がてり 神風の 伊勢娘子ども 相見つるかも
(巻一―八一)

類似の光景がそこに詠まれていることが理解されよう。さらに、それは越中国の国府でのことではあるが、

もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ 寺井の上の 堅香子の花
(巻十九―四一四三)

と大伴家持が詠っていたことが思い出される。国庁の付近には良泉があり、その井戸の傍らに絶えず水汲みの娘子たちが往来し賑わいをみせていたのもあろう。いずれも井と娘子という組み合わせである。このような萬葉歌が引用された理由はいずれ明らかにされるとして、ここでの問題である五三番歌に戻らなければならない。

五二番歌との関係から、この「大宮仕へ」とは「御井の清水」に奉仕することであると考えることが適当であると思われる。そしてこの「御井の清水」には二つの可能性がある。その一は大嘗祭の御井であり、今一つは祈年祭の御井である。大嘗祭の記録は「天武紀⁹⁾」に初出し、祈年祭のそれは「天智紀⁹⁾」に初出する。即ちこれらの祭式儀礼が存在

していたことは確認できるのであるが、その詳細は、『儀式』『延喜式』や、『江家次第』などの故実書、公家の日記類といった平安朝の書物に拠らざるを得ない。当然ながらそれらの書物に記されている祭式や儀礼は、あくまでも律令制下のものであり、さらに平安朝の変容を考慮に入れねばならぬものばかりであることは言うまでもない。特に我々が着目するこの律令制以前の祭祀儀礼の復元にはこのような大きな史料制約があるのではあるが、本稿に関連する限りに於いて敢えてその考察を試みてみなければならない。

先ず、大嘗祭の御井が「藤原の御井」であることの可能性から検討してみよう。『踐祚大嘗祭式¹⁰⁾』に拠ると、大嘗祭の一連の行事の中で、御膳御酒を準備する斎場の造営に於いて、二処をトして御井を掘り、醸酒に当つて井の神を祭ることを述べている¹¹⁾。二本の井戸はそれぞれ神饌・神酒の用水に当てられたが、その一は「御井」、もう一つは「造酒児井」と名付けられている。この「造酒児井」に係わって造酒児(造酒童女)という娘子¹²⁾が重要な役割を果たしているのである。

踐祚大嘗祭には『天神之寿詞』を中臣氏が奏上することが定められている¹³⁾。文献上の初見は、『持統紀』四(690)年正月条¹⁴⁾の即位礼、及び五年十一月条¹⁵⁾の大嘗祭に於けるものである。藤原宮遷都が持統八(694)年であることを考えれば、持統の大嘗祭の御井と五二番歌の御井は、とりあえず無関係であると判断しなければならないことになるが、今暫くここに留まってみよう。

この中臣が奏上する『天神之寿詞』は、神代の物語にことよせて新帝の即位を祝福するものとしてあったことは、『令義解』や『令集解』がこの言葉に注釈して「謂。以_レ神代之古事_一。為_二萬壽之實詞也_一」と記すことから知られるのであるが、『天神之寿詞』そのものは残念ながら残されてはいない。が、かろうじて平安末期藤原頼長の日記『台記』の別記に、康治元(1142)年の近衛天皇の大嘗祭の時のものが『中臣寿詞¹⁶⁾』として筆録されたおかげで、今日その概要を知ることができる。「神代之古事」と言われていると思しき神話的伝承部分を要約で示してみよう。

天孫降臨の際、天忍雲根が天児屋の命を受け、神漏岐・神漏 美二神に会って、「皇孫の御膳の水として、現し国の水に天つ水を加えて献上したい」と申し出た。そこで二神は、天忍 雲根に玉串を授け、これを地上に刺し、呪言を唱え、「天の八井」が湧き出る方法を教えた。これを「天つ水」として、神酒・神饌を作ることにしたという。

謂ゆる「天つ水」の神話と呼ばれる部分であり、この部分こそ、本来の『天神之寿詞』の核心を伝えるものであり、即位式で奏上されたのは、この御膳の水、即ち御井の水に関わるこの部分であると思われる。ここに言われる「天つ水」が現実的に雨水のことを指すことは、ほぼ間違いないと思われる。「雨水を交えた御井の水を、御饌の水とすること、御井の水を、天上の聖水と等しからしめんとする呪術的な試みであ¹⁷⁾り、先に考察したように残念ながら藤原宮には当てはまりはしないが、斎場に掘られた井戸は「天の八井」としてあったのであろう。ここではこれ以上考察する暇はないが、この「天つ水」の神話とよく似た神話が、伊勢神宮の末社「御井社」とその井である「忍穂井」の起源神話として伝えられていることを付記しておこう。「大王の即位の儀礼に読み上げられる『中臣寿詞』とほぼ同じ詞章が、大王の最高守護神の御饌の料の水について語られていたとしても、不思議ではない¹⁸⁾」のである。

続いて、祈年祭の「御井」である可能性を検討してみよう。『延喜式 卷一 神祇一』『四時祭上』に拠ると祈年祭は、毎年二月四日神祇官の齋院に於いて、官が奉幣する七百卅七座の神々を祭るもので、中臣が祝詞を読み、忌部が諸社の神主、祝らに幣帛を班給するというものである。祝詞¹⁹⁾は、天つ社・国つ社の皇神たちに、皇孫命の幣帛を奉る旨を述べた後、祈念の対象になっている神名を一つ一つ挙げて、奉幣の主旨を述べるのであるが、それらの神々の名と順序は、「御年の皇神等」、「大御巫(神祇官の御巫)祭神八座」、「座摩巫祭神五座」、「御門巫祭神八座のうちの櫛磐間門・豊磐間門二神」、「生嶋巫祭神二座」、「伊勢の天照大神」、「御縣坐六神」、「山口坐六神」、「水分坐四神」である。磐間門神、山口神、水分神については既に触れたところであるが、ここで問題となるのは、『神名帳』に言う、宮地を傾く「宮中神卅六座」の内、「神祇官西院坐御巫等祭神廿三座」の中の「座摩巫祭神」としての「生井神・福井神・綱長井神²⁰⁾」の三神である。『延喜式』ではこの祈年祭での御井祭の他にも、四時祭の御川水祭、臨時祭として御井祭、座井祭、御井並 御籠祭等の水或いは井戸に関する祭を行うことが規定されている。「[各々の祭の詳細はわからないが、……その中でもっとも重要なのが座摩巫が執り行う御川水祭で、祈年祭の祭祀の対象となっているのも、御川水祭で祭られる生井・栄井・津長井の神であった²¹⁾」のである。藤原宮に於ける「御井」の位置はなお不明²²⁾ではあるが、この三神は内裏に掘られた「御井」の神なのである。藤原宮に於いてもこれら『延喜式』に規定される御井の祭が行われていたのであれば、その祭は御川水祭とほぼ同じ形式で行われたものと判断すべきであろう。決定的な決め手には欠けるものの、これらの祭式は毎年の行事であり、これらの祭の対象となる三神が坐ます「御井」こそが五二番歌の「御井」であり、「娘子がとも」とは座摩の巫女²³⁾をさし、「大宮仕へ」とはこれらの神々に仕えることである可能性は高いと言えるのではなかろうか。

以上「御井」に関する祭の考察から、「藤原宮御井」がどのような性格をもつものであるかについての推定が行われた。だが、吉野と藤原という二つの場所の関係と、吉野がここに詠み込まれていることについてはなんらの解答を与える迄には至っていない。これらの問題に答えるために、ここでの考察から浮かび上がってきた新たな疑問点を拾い上げておくことが有益であろう。

まず、宮廷儀礼の検討から宮殿の「御井」には神が坐ますることが注目される。座摩巫祭神三座であり、大嘗祭に於いて醸酒に先立って祭られる神である。『貞観儀式²⁴⁾』に拠ると、この時祭られる神は丹生川上社の祭神であった「意加美²⁵⁾」なのである。先には「意加美」とは雨乞いの神であったのであるが、そもそもこの「意加美」とは如何なる性質を有した神なのであろうか。そしてどのような理由で、この雨乞い神たる「意加美」が「御井」と結びついたのであろう。雨雲を名とする神や雨水が寿詞の中で讃えられていたことと考え合わすなら、ここでもやはり雨乞いということが最重要な意味だということなのであろうか。

次に、祈年祭の最初の記事は「天智紀」にみられることについては既に触れたが、その記事には「山御井傍²⁶⁾」即ち、山麓の井泉が祈年祭の祭場に選ばれたことが記載されている。これに関し「山麓の井泉が祈年祭の祭場に選ばれていることは然るべきこと²⁷⁾」であるという興味を引く言説がある。言わんとするところは井泉の「傍」は全国の神々を迎えて祭る、祈年祭に最も相応しい場所と観念されていたということであると思われる。とすれば既に予感されていたように、重要

なのは「御井」ではなく「井」そのもの、「水」そのもの、そして「井」に坐す神ではなく、「井」そのもの、或いは「井」のある場所なのではなかろうかという疑問が生じてくるのである。

III. 井泉・境界・水

これらの疑問に答えるためには、前に保留しておいた文献を渉獵するという手続きの中から井戸、或いは泉がどのように「生きられ」ていたかを確認する必要がある。『記紀』や『風土記』の説話の中には、神聖な井泉の由来が大王に関わるものとして語られるものが少なくはない。『風土記』から井泉に関わるの説話を拾い出すことは容易である。『風土記』に集められた「井」に纏わる一連の説話群は、その大半が地名起源に関わるものであることは周知の如くであるが、それを超えて「井」の意味そのものを密かに伝えていると思われるものがある。以下順次それら説話の注目部分の引用を交えながら考察していくこととする。

即穿_ニ新井_一 今存_ニ新治里_一 随_ニ時致_一 祭 (『常陸国風土記』「新治郡条」)
 即 頓_ニ幸槻野之清水_一 臨_ニ水洗_一 手 以_ニ玉榮_一 井 (『常陸国風土記』「行方郡条」)
 遂到_ニ赤石郡斯御井_一 供_ニ進御食_一 故曰_ニ斯御井_一 (『播磨国風土記』「賀古郡条」)

地名説話にのみ関わりと判断されるものは省略に従うこととするが²⁸⁾、先ずこの三例からは「井」或いは「井」のほとりで行われたであろう地方的な祭儀の存在、そして地方首長層が井泉のほとりで祭儀を行う風習が、全国各地に普遍的に存在していたことが確認できよう。次に以下の五例をみてみよう。

其側流_ニ泉_一 冬夏不_レ絶 自_ニ坂已東諸国男女_一 春花開時秋葉黃節 相携聯 (『常陸国風土記』「筑波郡条」)
 關 飲食賔賓 騎歩登臨 遊樂栖遲 (『常陸国風土記』「筑波郡条」)
 郡東國社 此號_ニ縣祇_一 社中寒泉 謂_ニ之大井_一 縁_ニ郡男女_一 會集汲飲 (『常陸国風土記』「行方郡条」)
 村中淨泉 俗謂_ニ大井_一 夏令冬温 湧流成_ニ川_一 夏暑之時 遠近郷里 酒肴賔賓 男女會集 休遊飲樂 (『常陸国風土記』「久慈郡条」)
 忌部の神戸 ……御沐之忌里 故云_ニ忌部_一 即川邊出_ニ湯_一 出湯所_ニ在兼_一海陸 仍男女老少 或道路駱駝 或海中沿_ニ洲_一 日集成_ニ市_一 繽紛燕樂 (『出雲国風土記』「意宇郡条」)
 呂美冷泉 東西北山 竝嵯峨 南海瀆漫 中央鹵 灑瀆々 男女老少 時々叢集 常燕會地矣 (『出雲国風土記』「嶋根郡条」)

「良水の出る井泉は珍重せられ、そこを中心に宮が営まれたり聚落が形づくられたりしたのである」と想像されていた光景が、そして先の家持歌を髣髴させる光景がここにはあろう²⁹⁾。井泉のほとりで別集団に属する互に見知らぬ男女が出会い、そこで宴が催される。井泉のほとりでの男女の宴は農耕儀礼とは無関係にそのまま歌垣の世界へと繋がりに行く。「井」に於いて祭が行われ、歌垣が行われたという事実は、市或いは衢と同様に「井」或いは「井」のほとりが境界領域であるということを明示するものであろう³⁰⁾。『風土記』には「井」が境界と意識されていたことを思わせる、次のような不思議な話も掲載されているのである。

此里此治山頂有井 其名云眞奈井 今既成沼 此井天女八人
降來浴水 (『風土記逸文』「丹後國」)
此村在井 一女汲水 即被吸没 故曰號修布
(『播磨國風土記』「賀毛郡条」)

何処からともなく天女が飛び来たり、何処へともなくまた飛び去って行く。この話は何処とも知れない場所が知られないながらも天上世界を想像させるものと言えよう。それに反し二例目の話はなにか地下世界を思わせるものであると言えようか。

前節での考察に於いて宮殿の「御井」には神が坐ますと観念されていたことが確認されたが、『風土記』に於いては如何であろうか。

在酒殿泉之邊 …… 奏云 此地有神 (『肥前國風土記』「基肄郡条」)
此村有泉 同天皇 行幸之時奉膳之人 擬於御飲令汲泉水 即有蛇龍 謂於備美
(『豊後國風土記』「直入郡条」)

ここでもやはり「井」には神が坐ますと観念されていたことが理解される。そしてその神はやはり「於備美」と呼ばれているのである。即ち宮殿の御井に坐まし、丹生川上社に坐すあの「オカミ」なのである。『記』では「暗淤迦美神」、『紀』では「暗龍」或いは「高龍」と表記されて登場する³⁰⁾。話としてはいずれも血又は剣から化成した神であるとされているが、大系本頭注が言うように、その神徳は谿谷の水を掌ることにあろう。また『記紀』ではこの「オカミ」と並んで「暗御津羽神」「暗罔象」が登場する。この神と丹生川上社の祭神である「罔象女神」とが同一の神を表すものとは、その生誕の事情³²⁾からして考え難いが、その本質は類似すると思われる。またこの神について、大系本頭注は次のように解説する。先ずその名「ミツハ」を「水つ走(ハ)」又は「水つ早(ハ)」かとし、「灌溉用の水を走らせる女神の意であろう」とする。また『淮南子』の「汜論訓の注」に「水之精也」とあることや、『莊子』「達生」に「水有罔象」とあることを紹介し、『罔象』は水神、また水中の怪物であり、『罔』は、形をかくして見えない意であることを説く³³⁾。要するにこの神の名が唐土に由来するものであろうがなかろうが、井泉の内に、その水の中に、「見え」ないながら、怪物或いは靈物、つまり神なるものが潜んでいることが確信され、その人知を超えた正体不明のなにものかを「罔象」と名付けていたのである。

乃至山口 標稅置 堺堀 告夜刀神 自此以上 聽為神地 自此以下 須作人田 自今以後 吾為神祝 永代敬祭 冀勿祟勿恨 設社初祭者 神蛇避隱 所謂其池 今號椎井池 池回椎株 清水所出 取井名池
(『常陸國風土記』「行方郡条」)

前稿³⁴⁾でも若干触れた有名な夜刀神伝承とその後段である椎井伝承の一部である。夜刀神伝承では、神の領域と人間の領域が分節され、その境界である清水の湧き出る山の口に社を設け、以後この夜刀神を祭ったことが言われる。ここでは省略したがこの伝承の引用以前の部分に「俗云 謂蛇為夜刀神 其形蛇身頭角」と割注されている。即ち、夜刀神の正体は頭に角のある蛇であることが言われているのであり、椎井伝承ではこの神は泉にその姿を隠すことが言われるのである。大三輪の神が水神であり蛇体であったことが思い出されもする。すぐ前の引用で「オカミ」は「蛇龍」と表記されていることを考え合わせれば、この夜刀神もやはり「オカミ」と呼ばれて然るべきでもあり、これが「オカミ」の最も古い形を表すものであると思われる。形を隠してその姿を現さない水神が蛇に姿を変えて現れると信じられていたのであろう。この伝承では神が祭られる対象として描かれているが、実は清水が湧き出し、池をなしたこの椎井と名付けられた池そのものが祭られていたと考えることはできないであろうか。「井に神を祭った場合、井を支配する神などというような抽象的なものを考えたのではなく、部落民に恩恵を施す井そのものに神を捉えたとしなければならぬ³⁵⁾」と考えることは、或いは言い過ぎであるかも知れないが、「井」そのもの「水」そのものが最重要であるとする考えは当を得ていると思われるからである。「井」や「池」を神体とする神社は幾つか存在しているが、ここでは古代四文献に登場するもう一柱の水神「泣澤女神」と、この神を祭神とし、「井」そのものを神体とする神社について触れておかなければならない。

香久山の北西麓間近、一般に埴安の池が想定されている辺りに、式内社畝尾都多本神社がある³⁶⁾。この神社が次の萬葉歌に詠われる「泣沢の神社」に比定されている社である。

或書の反歌一首

泣沢の 神社に御酒掘え 祈れども 我が大君は 高日知らしぬ

(巻二一〇二)

右の一首は、類聚歌林に曰く、「檢限女王、泣沢神社を怨むる歌なり」といふ。日本紀を案ふるに云はく、「十年丙申の秋七月、辛丑の庚丑に、後の皇子尊薨す」といふ。

『記紀』神話では³⁷⁾この「泣澤女神」は涙になった神であるとされているのではあるが、「泣き沢」つまり「鳴く沢」というその名は、音を立てて、水が湧き出している場所に坐す神であることを明快に示しているものと思われる。さてこの萬葉歌であるが、左注に見る通り、泉の神に皇子の蘇りを祈ったが、その祈り届かず返って恨み言を言う歌である。これまでみてきた水の意味は灌溉用水・飲料水という実利的な意味が主であった。そしてここでは触れ得なかったが、禊ぎ・清めの水、即ち浄化力という意味も水は有していた。人々は水に様々な願いを託し、且つ祈ったのであったが、この水神の司る意味はそれまでにない全く新しい意味であると思われる。生命が蘇る、生命を再び誕生させる。つまり水の神は生命をも司っているものであり、水に託された新しいこの観念は不老不死、即ち若水、をちみづ(変水)等に連結していくのでもあろう。現実的な意味からこのような神秘的な意味までもが託されるように変化するのは、勿論歴史的変遷に拠るものではあろうが、その根本は現実の「水」そのもの以外ではないのである。あらゆる観念が現実とその根を持つものであるならば、吉野の川の流れて永遠を「見た」のと類似して、こういう観念が水と結びつくのは水が滾々と湧いて止まない、そういう水の永遠性が根柢にあるということなのであろう。

大きく迂回して文献に現れる全ての水神と、井泉に託された意味をみてきたわけである。井泉のほとりは祭場であり、衢や市と同様歌垣の行われる境界領域であった。井泉のほとりが祭場とされたのは、その「井」や「泉」、即ち「水」の中に「見え」ない神を「見た」ことに始まったものであろう。神という言葉に抵抗を感じるなら、永遠性なり、神秘性なりを「水」に「見た」と言い換えても一向に差し支えない。どのように言い換えようが、井泉は神出現の場であり、人知を超えた神なるものに会える場所、神なるものを「見る」ことが可能

な場所として先ずあったのである。神なるものと出会える場所は同時に、互いに見知らぬ人間同志が出会うべき境界的、即ち無記なる場所でもあったということなのである。

IV. 二つの場所・彼方と此方

藤井が原と吉野、この二つの場所はどのように構造化されればよいのであろうか。持統の吉野行幸に従駕した二人に拠る、吉野宮での詠み歌を引用しよう。

太上天皇、吉野宮に幸す時に、高市連黒人の作る歌

大和には 鳴きてか来らむ 呼子鳥 象の中山 呼びそ越ゆなる

(巻一一七〇)

吉野宮に幸す時に、弓削皇子、額田王に贈り与ふる歌一首

古に 恋ふる鳥かも ゆづるはの 御井の上より 鳴き渡り行く

(巻二一一一一)

いずれも藤原京に居る想い人への贈答歌である³⁸⁾。山塊に拠って隔てられた此方と彼方は、地表に否応なく縛り付けられている人間にとつては、実際の距離以上に遠い。その上縷々みてきた如く、吉野という場所が他の場所と異なった別世界と観念されていたのであれば二つの場所は、互いに隔絶しているとすら感ぜられていたであろう。私的な感情を抱いていた詠み手にとっては絶望的に遠かったに違いないのである。ところが、恐らくこのように意識されていたであろう両場所の距離は、大空を飛翔する鳥たちにとっては易々と越えられるものであることが、即ち鳥たちにとって二つの場所などという概念そのものが、そもそも問題とならないものであろうことが羨望されているのである。二つの場所が同じ地表上に存在する限り、地表を覆う天空が連続するのは当たり前の話ではある。ここで問題とされるべきは二つの場所の、平面的・物理的距離ではなく、空間的且つ意識的、謂わば「生きられ」た距離なのである。即ち、地表に於いては遠く、天空に於いては近いものと意識されていたと言い得ようか。それでは地表面の下に於ける事態は如何であらうか。ところが残念ながら、当時の吉野と藤井が原を地下に於いて結びつける直接の史料はないと言わねばならない。だが、都が奈良に遷って暫くして始まり³⁹⁾、現代に於いても営々と受け継がれている非常に注目すべき行事がある。有名な東大寺二月堂の修二会に於ける「お水取り」がそれである。若狭の海にそそぐ遠敷川の水が、遠い空間を隔てて東大寺二月堂の斜面の下の間伽井屋の中に掘られた「若狭井」に流れくる。その水を「間伽水」又は「香水」と呼びこれを汲む行事が謂わゆる「お水取り」であることは説明を要しないであろう。この行事が神道に由来するものであるか、陰陽思想或いは仏教思想に基づくものであるのかについての穿鑿はここでは無用である。注目すべきは、それが例え年に一度のことであっても、彼方の「水」が此方の「井」にあると信じられていることである。「井」から離れた場所の「水」が湧き出すということは、地下に於いて水路が繋がっているという幻想とも言うべき確信がその根底に存在しているものと思われる。このように理解すれば、先述の座摩巫の井の三神の一神「津長井神」が「地下に伏道ありて、遠くその脈より来りて溜る由なり。然れば、井泉の神なる事云ふも更なり⁴⁰⁾」と説かれていたことも肯けるものとなるのである。

このような幻想は幾例か掲げられるのであるが⁴¹⁾、次にやはり吉野と大和に関する事例をみておかなければならない。それは同じく現代

に受け継がれる「大汝参り」という民間信仰である。上市のすぐ東に吉野の妹山があり、この山に式内社大名持神社が祭られている⁴²⁾。この神社のすぐ前を流れる吉野川の淵を、古来より潮生淵と呼ぶ。その名は毎年旧暦の六月晦日に、この潮生淵から熊野の潮水が湧き出ると信じられていることに由来するという⁴³⁾。この潮生淵で「水垢離」即ち禊ぎを行い、河原の石を拾い、水を汲んで持ち帰る。そうして持ち帰った水を自分たちの村の川に流し、一同がその水で禊ぎをすると言う。これが「大汝参り」の習俗のあらましであり、香久山周辺の村々、耳成山口神社の宮講⁴⁴⁾を含む国中や宇陀郡までの大和南部地域で信仰されている。またほぼ同じ主旨の祭儀が畝傍山口坐神社に於いても行われていることを見逃してはならない⁴⁵⁾。或いは「再生をたくす『変若水⁴⁶⁾』の祭儀であらう」かとも論ぜられたりしているが、この祭儀が何を目的とするものかは必ずしも明らかではないようであるが、それでも大和三山と吉野とが、そしてここではさらに熊野と吉野とが「水」に拠って繋がっていることを想わせるに十分な事例としてあり得るであろう。この事例に於いては、熊野の「水」が吉野を経由し、人の手を借りて大和へと運ばれるのであるが、元々は熊野とは無関係に、吉野の「水」が人の手を借りるまでもなく大和へ流れ込んでいたと幻想されていたものと思われる。

いずれにせよこれらの例に於いて、それぞれ彼方の「水」は年に一度、遠い距離をものともせず、大和に流れ来たりて湧き出るのである。互いに距離を隔てた二つの場所が「水」に拠って連続する。その時、大和の「水」は即吉野の「水」なのであり、若狭の「水」なのである。それはとりもなおさず、二つの場所そのものがびたりと一つに重なるということを言うに他ならないのである。即ち、その刹那、大和は吉野であり熊野であり、若狭なのである。そこでは最早流れ込むとか、地下水路が云々であるとかの理屈は全く意味を為すものではなく、遠い近いという距離概念すらも無効なのである。ただ端的に重層する。我々にしてみれば幻想と呼ばざるを得ない現象であったとしても、それを「生きた」人々にとって、幻想は幻想の儘、厳然たる事実なのである。空間は均質ではなく、融通無碍に伸縮するという言い方が相当する事例であろう

遠く隔たった彼方と此方は「水」に拠って、「水」を介して重層することが覗き見られたのである。藤原の「御井の水」と吉野川の「水」、つまり藤井が原と吉野という二つの場所についても同様の構造の存在が予想されもしようが、結論を下すのは以下の幾つかの問題を考察した後になされなければならない。

「井」や「泉」が境界であるということ、そしてそれらの場所に神なるものを「見た」痕跡の確認がなされた。即ち、神出現の場として「井」や「泉」があったことが確認されたとしてよいものと思われるが、そこには新たに、その神なるものはどこから、そしてどのように現れるのであろうかという疑問や、或いは境界とは言うもののそれは具体的にどこどここの境界であるのか、さらに、如何にして「井」や「泉」は境界足り得たのか、何故その「水」は「井」や「泉」から湧き出す「水」でなければならなかったのであろうか等々という疑問が生じているからである。こうした観点から再度「井」に関する伝承を検討してみよう。先ず若干極端とも思われる神話時代の「井」を見てみよう⁴⁷⁾。

……其綿津見神之宮者也。到_レ其神後門_一者、傍之井上、有_二湯津香水_一。故、坐_二其木上_一者、其海神之女、見相議者也。訓_二香水_一云_二加津良_一。木。故、随_二教

少行、備如_二其言_一、即登_二其香木_一以坐。爾海神之女、豐玉毘賣之從婢、持
玉器_一將酌_二水之時_一、於_二井有_一光。仰見者、有_二麗壯夫_一。則_二壯夫_一云_二遠登古_一、
下效_二此_一。 (『古事記』上卷 海神の宮訪問)

火遠理命の海神の宮訪問譚である。ここでも「井」は神出現の場として、神と出会う場として重要な意味を担うものである。それは「水に写る影を見て樹上の者に気づく有様は、水中から火遠理命が出現したと少しも変わりはない⁴⁸⁾」からである。さらに例を重ねよう。前稿で既に触れた吉野の「井」である。ここでは『古事記』から引用しておくこととしよう。

從_二其地_一幸行者、生_二尾人_一、自_二井出來_一。其井有_二光_一。爾問_二汝者誰也_一、
答_二曰_一僕者國神、名謂_二井氷鹿_一。此者吉野首等祖也。

(『古事記』中巻 神武天皇東征集)

ここに登場する吉野首の祖とされる「井氷鹿」は、先述したようにその姿は尾がある異形に描かれてはいるが、「其井有_二光_一」と記されているように、一面に靈威を持つ「國神」である。そして「井」に関わる神であることから、やはり「泉井の神なのであろう⁴⁹⁾」と推定される神である。この例では先の火遠理命の例よりはるかに明確に、神たる「井氷鹿」は「井」の中から出現するのである。既に我々は、この二例以外にも井泉の辺に、或いは吉野川のほとりに、神なるもの以外に、天女や仙女といった人ならざるものが出現する、若しくは出会うという事例をみてきた。これら全ての例は、水に関する神に限らず、人ならざるものは水を通して顕現するという確信が存在していたことを物語るものと言えるのではなからうか。そして人ならざるものの出現の場所として「水」のほとりが際立つのは、それは神なるものが潜む場所ではなく、人間世界と隔絶した、神なるものの世界や常世の国、或いはあの世といった「彼方」への出入口と解釈してその意味は十全なものになるのではなからうか。人ならざるものの世界と人間世界との接点井泉なのである。人ならざるもののみが交通可能である「水」そのものが、異界との通路として、そこへ接する境界的な存在であり、「此方」には他界の表象として「井」や「泉」があったのである。

V. 結 ——吉野と藤井が原

本節は本稿の結論として、ここまで得られた全ての知見を総合し、藤井が原と吉野という二つの場所の構造化を試みるものである。この試みは同時に、藤原京の風景の全体構造が素描されることともなろう。風景論という本稿の立場から知見の組み替えが試みられるのである。

前稿では二つの場所の関係が、境界としての「水」との関わりの中で論じられた。そこでは既に、「彼方」「此方」という概念が導入されていたのであるが、それは未だ曖昧な儘での使われ方であった。本節では、「此方」を藤井が原に固定し「彼方」である吉野との関係構造の定着を試みる。この試みは同時に、自ずと五二番歌に吉野が詠み込まれる必然性の解明の試みともなるであろう。「此方」を藤井が原に想定するということは、「御井歌」の詠われ方に即す、つまり視点、意識の在りどころとして藤井が原を想定することに他ならないのである。この想定は言い換えれば、そこに「見え」る限りの範囲が、即ちたまたなく青垣の「内」なる大和盆地(南部)が、この歌の作者及び天皇に代表される都人にとっての第一の、そして唯一の地平であるということ承認することを意味することとなるであろう。そしてそうした地理

的拡がりの一部である藤井が原という領域は藤原京の造営と相即して「内」なる場所として、さらに細分節、再限定されたのである。些か模式図的ではあるが、「内」なる大和の「内」なる藤井が原として、同一平面上に同心円構造を想い描けばよいであろう。この再限定の事情は、前稿⁵⁰⁾に於いて詳しく論述されたように、限定は三山と吉野に拠って、恰もそこに「見え」ない限定面が設定されるかの如くなされていたのであった。大和三山が「門」を表示することに拠って、境界の標示として在ったのである。藤井が原という場所はこのような二重の限定によって「内」の「内」なる場所として地平の上に「図」として浮き彫りとなるのである。つまり藤原京という現実世界はこのように構造化されたのである。さらに言い換えれば藤原京という場所、即ち安らげる生活世界がそこに「開か」れて在るのである。地表上のあらゆる場所が構造化されているわけではないが、人は場所を構造化しつつ「生き」るしかないのである。

この「藤原宮御井歌」は藤原京という場所が「開か」れたことを高らかに詠い上げるものに他ならず、宮と王権の永遠なることを願うことは、この安んじてある「開かれ」た場所の常久なることを願うものに他ならないのである。既にみた儀礼・祭式と同じく、放置しておくことと閉塞し「外」なる場所へと解消せんとする必然への、有限を「生き」るものの、それはせめてもの抵抗なのでもあろう。

地表がこのように「内」「外」なる場所として構造化されるという考え方からすれば、藤原京という世界はひとまずは完結した世界と考えられよう。ところが言うまでもなく、全く他と絶縁して独立完結する世界はないのである。つまり「外」なる場所との関係に於いて、「外」があって初めて境界というものが意味を持ち「内」なる場所が成立するのである。この周りの事情については、「門」に於いて特徴的であった境界の両義性のこととして既に考察されたところである。完結しているかに「見え」る世界はその完結を許容し支える、より大きな「地」としての地平に於いて在らねばならないのである。それではこの限定面の「外」は如何なる状況にあったのであるかということ、三山という「門」を通して無限の「彼方」に連なり行くものであろうとしても、これらの「門」の「外」側は未だ大和の「内」なる場所、つまり「内」なる「外」と考えるべきであろう。これに対し、現実には龍門山塊を指すものと思われる「吉野の山」と表記された南の境界面は「内」なる場所を「内」なる場所と「見せ」る「内」なる限定面として在りながら同時に、「外」なる領域の「外」なる限定面としても現象していたと考えなければならないのである。南に一山越えた吉野という場所は、最初から「内」なる場所ではなく完全に「外」なる場所と考えられていたであろうことはこれまでの考察から断じてよいからである。山の向こうに在る吉野という場所は、「此方」である藤井が原とは別の場所、異なった原理が支配する別の地平として「彼方」と呼ばれるに相応しい世界、即ち他界であったのである。吉野が「彼方」として在り得たのは、そこが人を超えたものの「住む」世界であり、人を超えたものたちの世界へと通じる「水」の在処であると信じられていたからに他ならない。大和世界を唯一の地平として考える時、その「外」側に在るべき吉野世界が、このようにそれ自身の地平に「開か」れたものである限り、吉野は「どうしても『内』にならない『外』」つまり「絶対的な他界^{51,52)}」と言われるべき世界であることを主張するものとして在るであろう。「彼方」とは単に距離が離れていることに拠るものではないのである。吉野は最早単に「外」と言われるべきでもなく、藤井が原と同位に並ぶ独立した世界でもあり得ないのである。同位でない

とする理由は意識の所在が藤井が原にあるからに他ならないのであるが、だからといって吉野が劣位に置かれていると考えるのは早計であろう。なぜなら縷々みてきたところから明らかなように、吉野なくして藤原京は成立しないとまで思わせるほどに重要な場所として吉野は在ったからである。

それではこれら以外にどのような解釈が可能であろうか。本稿は両場所の構造化解明は、やはり「水」に拠ってなされるべきであろうと考えるものである。即ち、「水」が境界であり通路であったこと、さらに「御井歌」がその標題と構成そのものに於いて「井」を讀んでいたことは、彼らの「住ま」う藤井が原と吉野が直に連続することが願われ、且つ信じられていたことを如実に示していると思われることに拠る。そしてこの連続とは、同一の地平の上での連結というようなものではなく、吉野は藤井が原という地平をその下面から裏打ちを成すかのように重なっている、或いは現実の生活世界である藤井が原という地平を吉野という人知を超えた無限の地平が、恰も同心球の如くに全方位から包み込んでいると考えるべき事態であると思われる。二つの世界は互いにその位相を変えて論じられなければならないのであり、殊更に「地平」という概念を導入した理由はここにあるのである。要するに、藤井が原という地平を「生きる」意識は同時に、遠い「彼方」の吉野の地平をも「生き」ているのであり、「藤原宮御井歌」に読み込まれた「御井の真清水」こそが、吉野と藤井が原を重ねる紐帯そのもののなのである。大和三山を「門」と解釈したことの連関から、この「御井」を神なるものとその世界を覗き「見」る「窓」とみる解釈は如何であろうか。神なるものとその世界は決して直接眼にすることの出来ないものであった。だがそうであるからこそよけいに「御井」の水面という「窓」を通して透かし「見る」ということが希求されていたのではなかろうか。「見た」といって欲せられたものは言うまでもなく吉野世界であり、「御井歌」に現実には「見え」ない吉野が詠われていた理由も、この透かし「見」の対象としてではなかったのであろうか。「彼方」の吉野を覗き「見」る「窓」が即ち「御井」であり、遠い「彼方」は、「御井」の底深く、即ち足下に重なっているのである。「天は足下にあり」と語った神秘主義的哲学者が想い起こされもする。

人は世界の多重性、地平の多層性を「生きる」ものであり、ここに縷々論じてきたあらゆる構造が風景として「生きら」れ、その全てがこの「御井歌」に結晶していると結論づけるのは果たして解釈の過剰であろうか。

註

- 拙稿：①「吉野の風景 『藤原宮御井歌』にみる風景の構造 Ⅱ」、日本建築学会計画系論文報告集 第511号, pp.217～222, 平成10年9月
- 「藤原宮御井歌」の考察は本稿を以て一応の完結をみることとなる。「御井歌」を三段構成と捉え、その第一段は「見したまへば」に注目し、古代特有の視覚の問題として国見儀礼への着目の中に（②「古代日本の風景『国見儀礼』にみる視覚の構造」、日本建築学会計画系論文報告集 第511号）論考された。第二段は、大和三山と吉野に分割されそれぞれに解釈が与えられた（③「大和三山の風景『藤原宮御井歌』にみる風景の構造」、日本建築学会計画系論文報告集 第480号、及び上掲した拙稿である）。本稿は、上掲した拙稿の続編であり、第二段の「吉野」の意味が第三段「御井」の意味付けの中に総合される。従って③②①、そして本稿の順に通読されることを希望する。
- 澤瀉久孝：萬葉集注釋卷第一, p.351, 昭和32年11月, 中央公論
- 土橋寛：「藤原宮」の宮号の由来—二つの<藤原>をめぐる—, 萬葉集の文学と歴史 土橋寛論文集 上, p.29, 昭和63年6月, 塙書房
- 同上：p.31
- 伊藤博：萬葉集釋註 一, p.226, 平成7年11月, 集英社
- この歌と関連して以下の歌を引用しておく。
やすみしし わご大君 高照らす 日の御子の 聞こし食す 御食つ国 神風の
伊勢の国は 国見ればしも 山見れば 高く貴し 川見れば さやけく清し 淡な

す 海も広し 見渡す 島も名高し こををしも まづはしみかも かけまくも
あやに恐き 山の辺の 五十師の原に うちひさす 大宮仕へ 朝日なす まづは
しも 夕日なす うらくはしも 春山の しなひ榮えて 秋山の 色なつかしき
もしきの 大宮人は 天地と 日月と共に 万代にものが

（巻十三— 三二三四）

反歌 山辺の 五十師の御井は おのづから 成れる錦を 張れる山かも

（巻十三— 三二三五）

- 十二月壬午朔丙戌、侍二奉大嘗一中臣・忌部及神官人等、并播磨・丹波、二國郡司、亦以下人夫等、悉賜_レ祿。因以部司等、各賜_レ爵一級。『日本書紀』天武天皇二年十二月）
- 三月甲戌朔壬午、於_二山御井傍_一、敷_二諸神座_一、而班_二幣帛_一。中臣金連宣_二祝詞_一。『日本書紀』天智天皇九年三月）
- 『延喜式 卷第七 神祇七』
- 「大嘗祭における「御井」の卜定は、平安朝の『儀式』や『延喜式』に見えるものではあるが、大嘗に際して悠紀・主基二国の卜定その他に中臣・忌部及び「神官人等」が奉仕することは、すでに「天武紀」二年十二月丙戌条その他に見えてゐるから、「御井」の卜定も天武朝に行われていたと見てよい（土橋寛：中臣寿詞と持統朝, 日本古代の呪縛と説話 土橋寛論文集 下, p.342, 平成元年10月, 塙書房）という説を支持するものである。また『踐祚大嘗祭式』に拠れば、大嘗祭の斎部の斎場と在京の斎場の二ヶ処に斎場が設置され、それぞれに井戸が掘られたことがみえるが、「二ヶ処の斎場は」もともと同じものの分化した形であろうと思われる（松前健：古代伝承と宮廷祭祀, p.57, 昭和49年4月, 塙書房）のであり、藤原宮に於いては、その井戸は宮域に掘られたと考えてもよいものと思われる。
- 以_二當部大少領女末_一嫁_二土食者_一充_二之_一。（『延喜式』 卷第七 神祇七）
- 十一月戊辰、大嘗。神祇伯中臣大嶋朝臣讀_二天神壽詞_一。『日本書紀』持統天皇五年十一月）
- 四年春正月戊寅朔、物部麻呂朝臣樹_二大盾_一。神祇伯中臣大嶋朝臣讀_二天神壽詞_一。畢忌部宿禰色夫知奉_二上神靈劍鏡於皇后_一。皇后即天皇位。『日本書紀』持統天皇四年正月）
- 凡踐祚之日。中臣奏_二天神之壽詞_一。（『神祇令』 十三条）
- 『中臣寿詞』より本稿に關係する部分を引用しておく。
中臣、遠都祖天兒屋根命、皇御孫尊、御前、奉仕。天忍雲根神、天_二上_一奉_二上_一。神漏岐神漏美命_二前_一、受給_二中_一、皇御孫尊、御膳都水、宇都志國_二水_一、天都水_二加_一奉_二申_一。事教給_二依_一、天忍雲根神天、浮雲_二乘_一、天_二上_一上坐_二、神漏岐神漏美命_二前_一、中_二天_一玉櫛、事依奉_二、此玉櫛、刺立_二、自夕日至朝日照_二、天都詔戸_一、太詔刀言、以_二告_一、如此告_二、麻知_一、弱蒜_二由都簀生出_一、自其下天_二八井出_一、此_二持_一天都水_二所聞食_一、事依奉_二。
- 前掲11)松前論文, pp.62～63
- 岡田精司：大王と井水の祭儀, 講座 日本の古代信仰 第3巻 呪ないと祭り, pp.198～199, 昭和55年2月, 學生社
- ここに要約するのは勿論『祈年祭祝詞』であるが、『月次祭祝詞』にもほぼ同様の詞句がみられる。
- 祝詞では「生井・榮井・津長井の神」と見える。また『神道大辞典』に拠れば、この三神は順に、流水・醴泉・井泉を各々掌り分かち守るとされる。
- 土橋寛：「藤原宮御井歌」の特異性と中臣氏, 萬葉集の文学と歴史 土橋寛論文集 上, p.36, 昭和63年6月, 塙書房
- 因みに、平安京内裏に於ける御井の位置は豊樂院の西、典藥寮の南である。
- 御川水祭座摩巫各行_二事_一。（『延喜式』 卷一 神祇— 四時祭上）
- 「(十月月上旬)、次各_二稻實_一ト部欄互_二ト部率_一造酒童女井=物部_二人等_一祭_二六神_一」とある細書に「竈門井山積 意加美水_二神_一」, 井の意加美の名がみえている。（『貞觀儀式』 卷第三 踐祚大嘗祭儀 中）
- 『古事記』には「淤迦美神」と表記され、『日本書紀』では「麗」である。
- 前掲21)で、「この「山御井」は三井寺の金堂の傍らにある御井だとするのが『日本書紀通証』以来の通説」であることが触れられている(p.36)。
- 同上
- 井泉に関する説話の全てをここに引用するべきではあろうが、紙幅の都合上本文に引用できなかったものを、以下に列挙しておく。『常陸国風土記』「總記」・衣浦濱の井／「茨城郡条」・多余の清井：『播磨国風土記』「掛保郡条」・宗我富の井／「掛保郡条」・流井、酒井、針間井／「讃容郡条」・大の村の御井／「託賀郡条」・都麻の井／「賀毛郡条」・佐々の井
- また家持には、同じ越中国司時代雨乞いの長短歌(巻一八— 四— 二二— 三)と、その結果の降雨を賀く歌(巻一八— 四— 二二四)が伝わっている。天皇と同様雨乞いが国司の職務であったのであろうか。また四— 二二番歌に「天つ水 仰ぎてそ待つ」という詩句があることを付記しておく。前掲2), 拙稿③, p.199～200
- 次集_二御刀之手上_一血、自_二手俣_一漏出、所_二成神名_一、則_二漏云_一久後。暗淤迦美神。兼以下三字、下_二後_一此_二次暗御津羽神_一。（『古事記』 上巻）
- 複頭垂重血、激越為_二神_一。號曰_二暗麗_一。次暗山祇。次暗罔象。（『日本書紀』 神代上 第五段 一番第六）
- 伊弉諾尊、拔_二劍斬_一柯遇突智、為_二三段_一。……一段は為_二高麗_一。（『日本書紀』 神代上 第五段 一番第七）
- また『萬葉集』には以下の歌が収められている。
藤原夫人に和へ奉る歌一首
我が罔の 麗に言ひて 降らしめし 雪の砕けし そこに散りけむ (巻二— 一〇四)
次於_二尿成神名_一、彌都波能賣神 （『古事記』 上巻）

- 其且、終之間、臥生、土神埴山姫及水神罔象女」(『日本書紀』神代上 第五段 一書第一) 一書第三第四もほぼ同様。
- 33) 『古事記』,『日本古典文学大系』,頭注一〇,p.60,『日本書紀』,『日本古典文学大系』,頭注二三,p.89
- 34) 前掲2), 拙稿③
- 35) 青木紀元:『日本神話の基礎的研究』,pp.4~5,昭和58年5月,風間書房
- 36) 前稿(前掲2), 拙稿③)で香久山も水と関係するとした根拠である。
- 37) 於、御涙所、成神、坐、香山之畝尾木本、名、泣澤女神。(『古事記』上巻) 其涙瀝而為神。是即畝丘樹下所居之神號、啼澤女神、矣。(『日本書紀』神代上 第五段 一書第六)
- 38) 一番歌は次の返し歌を持つ。
 額田王の和へ奉る歌一首 大和の京より遡り入る
 古に「恋ふらむ鳥は、ほととぎす けだしや鳴きし 我が恋ふること(巻二——二)」
- 39) 『東大寺要録』に拠ると、その始まりは天平勝宝(752)四年であるとされている。
- 40) 神道大辞典,p.1305,昭和13年7月,臨泉書店
- 41) 同様の例を一例だけ掲げておく。「高天原の武神タケミカズチと力くらべをした出雲の軍神タケミナカタをまつる諏訪神社上社の摂社、葛井神社はあきらかに「葛井の池」とよばれる楕円形の池を神体とした社であるが、伝承に、上社で使った一年中の御幣を大晦日の夜にこの池に捨てると、翌朝遠州のさなぎの池に浮かび上がるといい、諏訪の七不思議の一つと称している。この遠州のさなぎの池とは、今日浜松市西方の佐鳴湖とされており、湖畔にある竜雲寺の木宮住職の話では、近くの弁天祠の池の底は諏訪湖の底と通じている、という伝承があるとのことである。(金井典美:『温泉祭祀—豊草原の信仰と文化—』,p.25,昭和50年12月,法政大学出版局)」
- 42) 『三代実録』「貞観元(859)年正月廿七日条」に、祭神「大己貴神」を祭る記事がある。
- 43) 前登志夫:吉野紀行 新版,pp.59~60,昭和59年3月,角川書店
- 44) 池田源太:大和三山,p.134,昭和47年4月,学生社
- 45) 同上:p.113,「お峯山の水取り」と呼ばれる畝傍山口坐神社の代表的祭り。七月二八、九日に行われる「お峯のデンソソ」に付随する故実、二八日(現在は二六日)の早朝宮司が吉野川へ水を汲みに行く行事である。
- 46) 千田稔:吉野風景論—文芸者たちの「地図」—,吉野地域における文化的価値の再点検と信仰のための調査—昭和五十八年度報告書—財団法人 文化研究所,p.58,昭和59年3月
- 47) 本文には『古事記』を引用したが『日本書紀』の該当部分を以下に引用しておく。
 俯視、井中、則倒映、人咲之顔。(『日本書紀』「巻第二 神代下 第十段(一書第一—元)」)
 正見、人影、在、於井中、乃仰視之。(『日本書紀』「巻第二 神代下 第十段(一書第二)」)
- 48) 引木俱侑:水伝承,シリーズ 古代の文学5 伝承と変容,p.84,昭和55年2月,武蔵野書院
- 49) 松前健:総説,大阪成蹊女子短期大学国文学研究室編「吉野の文学」,p.5,平成4年6月,和泉書院
- 50) 前掲2), 拙稿③
- 51) 小松和彦:異人論—民俗社会の心性,p.243,昭和60年7月,青土社
- 52) 同上論文で小松も「内」と「外」の関係はやはりレベルに応じて変化することに触れているが、吉野に託されていた他界の観念もやがて、時代とともにさらに山を越え熊野へと及んでいくことになるのである。
- 尚、『古事記』『日本書紀』『続日本紀』『祝詞』『風土記』の引用は新旧岩波古典文学大系本に、『三代実録』『日本後紀』『延喜式』『令義解』については吉川弘文館新訂増補国史大系本に、また『律令』は岩波日本思想大系本、『貞観儀式』は現代思潮社版『日本古典全集本』をそれぞれ参照した。『萬葉集』については塙書房版『萬葉集』訳文篇からの引用である。

(1998年3月30日原稿受理, 1998年7月17日採用決定)